

まず『相生町誌』によると、移住世帯はほとんどの集落にわたっているが、中には馬路うまじのように、実際に1戸も移住しなかった集落もあった。町誌は総合

表 2

文 献 名	人 数 (世帯数)	備 考
昭和48年(1973)刊『相生町誌』	70世帯	
昭和58年(1983)刊『延野小学校百年史』	66名	昭和19年(1944)までの卒業生
同 上『日野谷小学校百周年記念誌』	21名	同 上
昭和50年(1975)刊『平野小学校の百年』	33名	同 上
昭和53年(1978)刊『西納小学校の百年』	18名	同 上
— 4 小学校を合計して138名—		

的な文献なので、表2の4冊の『小学校百年史』と比較してみると、該当世帯の遺漏が各集落に見られるのはやむを得ないことであるが、この4冊の百年史を分析すると（注1）、移住時期としては、明治20年代から大正時代にかけてが多く、昭和に入ると急減する。

明治40年代から大正初期にかけて、相生町の人口は5千人余で推移しているの、移住者総計で推計すれば、町人口の1割前後の住民が移住したのではないだろうか。その結果、伝統的な集落機能の維持に支障をきたす事態も生じた。一例をあげれば、延野では昔から住民共有の資産を有していたが、明治40年（1907）ごろ、北海道移住者が続出した。この結果、共有財産の管理が困難となり、次のような「従来ニ対スル決議」を行っている。

- (1) 今後他へ転籍移住等ノモノアルモ、一切権利ノ売買の行為ヲ禁止ス。
- (2) 移住中ニ於テ為ス村中ノ行為ニ付テハ、如何ナル事由ノ存スルモ、異議ノ申立或ハ此ノ間ニ於テ生ゼシ果実ノ分配ヲ請求スルヲ許サズ。
- (3) 不都合ノ行為ナキトキハ、何時帰参スルモ転籍前ニ於テ従来ヨリ存セシ権利ハ付与ス。
- (4) 不可抗力又ハ当然ノ行為ニヨリ、村ガ財産ノ全部或ハ一部ヲ失フコトアリタルトキ若クハ義務ヲ負フコトアルモ、之ニ対シテハ全々服従ノ義務アルモノトス。

（『延野本村傍示記録』を転載した『相生町誌』308ページ所載）

3. 北海道移住者による郷土への寄付調査

北海道に限らず、新天地を求めて故郷を離れた人々は、後年故郷の寺社や学校に浄財や物品を寄付する例は非常に多い。

徳島県から北海道へ移住した人々の調査は、研究者や研究機関の長年にわたる地道な努力が花開き、ここ数年急速に進み、新資料の発見が相次いでいる。こうした資料を駆使した研究論文の発表や企画展の開催が盛んとなり、県民の関心が非常に高まりつつある。そうした中で、北海道移住者が、県内の各出身地へ寄付した事例調査は、まだ十分に進んでいない現状にある。そのため、郷土班は、今回の現地調査の機会を利用して、相生町内に残る事例を全町規模で調査することにした。

調査対象として、相生町内のお堂を含む神社仏閣や学校を選び、全集落にわたり合計55か所を現地調査した。その結果、次のとおりの成果を得ることができた。

1) 竹ヶ谷の八面神社	2 例	(明治30・40年代寄進)
2) 牛輪の大宮八幡神社	5 例	(昭和20・40年代寄進)
3) 日野谷小学校	4 例	(昭和30年代寄付)
合 計	11例	

4. 寄付の個別事例

1) - (1) 竹ヶ谷 八面神社の狛犬 (図1・図2)

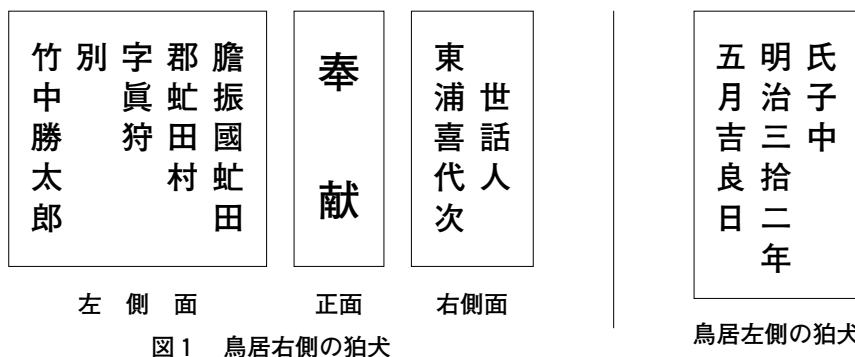


図1 鳥居右側の狛犬

鳥居左側の狛犬

竹中勝太郎氏の移住した虻田村字真狩別は、現在の虻田郡真狩村である。明治30年（1897）に阿波団体18戸が真狩別に入村している。真狩別村の昭和7年の統計（注2）では、全村475戸のうち、香川県出身者が159戸を占め、徳島県出身者は30戸で6.3%を占めている。

竹ヶ谷の東浦武次氏（80歳）のお話によると「東浦喜代次は私の曾祖父。八面神社は、竹中勝太郎氏の先祖が今の高知県東洋町野根から移



図2 竹中勝太郎氏寄進の狛犬左側面
(平成12年10月9日撮影)

し祀ったという。『西納小学校の百年』の卒業生名簿に「明治26年卒業 竹中谷五郎 竹ヶ谷」とあるのは勝太郎氏の兄弟と思われるが、現在竹ヶ谷には竹中姓の家はなく、竹市隆男氏の周辺に屋敷があったのではなかろうか」とのことである（平成12年11月30日採録）。

なお、東浦喜代次氏は「弘化元年（1844）～昭和3年（1928）。農業のかたわら旅籠屋や店を営み、部落惣代や衛生組長、神社総代等を勤め「郡長」とニックネームされる有数の実力者であった。大正2年に部落経営の製材工場が設置されたときには、その社長として敏腕をふるい、部落財政に貢献した。自らも広大な山林を集積して、竹ヶ谷の林業発展に

大きな功勞があった。嗣子仙太郎も村會議員をつとめた」という人物である（『相生町誌』25ページ所載）。

1) - (2) 竹ヶ谷 八面神社の幟（図3・図4・図5）

三月吉日	八面神社	明治四拾五年	住所
戌年男	西谷益蔵		

図3 幟の全体図

北海道天塩國上川郡剣淵村
和寒市街地拾貳番地

幟の住所



図4 幟の全景
(平成12年11月30日撮影)



図5 幟の住所の拡大写真
(平成12年11月30日撮影)

西谷益蔵氏の移住した^{けんぶち}剣淵村和^{わっさむ}寒市街地は、現在は上川郡和寒村となっている。

明治45年（1912）は戌の年に当たり、戌年生まれの子にちなみ、奉納された幟である。この幟は藍染のため、虫損がなく、極めて保存状態がよい。毎年の秋祭りには、今も現役で活躍している。竹ヶ谷の西谷姓の人は北海道へ移住し、西谷氏の屋敷跡は東谷久男氏宅となり、お墓は久男氏が守っている。

『西納小学校の百年』の卒業生名簿に「西谷タミ 明治30年卒業 北海道移住」とあるので、家族全員が移住したものであると思われる。北海道の西谷家は今は和寒町にはなく、西谷家出身の娘さん（陣内姓）が道内に健在である。

2) - (1) 牛輪 大宮八幡神社の玉垣（図6・図7・図8）

相生町^{あゆかわ}鮎川大国に住む中原義隆氏の父の兄が中原小六氏で、開拓に成功し、現地で質屋を商っていた。小六氏は移住後も何度か帰郷している。たまたま里帰りした際に、大宮八幡神社の玉垣改修の話の聴き、寄進を申し出たものである。長男の中原国重氏は既に亡くなり、現在は孫の中原正広氏（45歳）の代となっていて、義隆氏との間で年賀状の交流が続いている。

*中原 正広氏 北海道上川郡朝日町在住

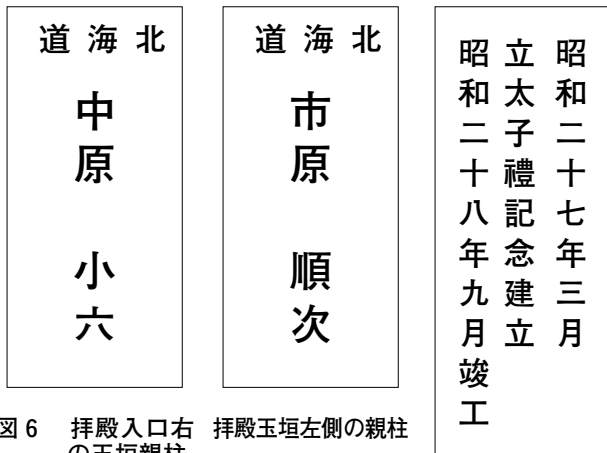


図6 拝殿入口右 拝殿玉垣左側の親柱の玉垣親柱

玉垣建立説明碑の碑文



図7 中原小六氏碑銘 (平成12年10月9日撮影) 図8 市原順次氏碑銘 (平成12年11月23日撮影)

* 中原 照夫氏 北海道富良野市在住

相生町鮎川大国に居住している市原清志氏の父の弟が市原順次氏で、現在90歳である。入院中であるが、清志氏宅と叔父・甥の交流を続けている。

* 市原 順次氏 北海道北見市在住

2) - (2) 牛輪 大宮八幡神社の宝物殿建設寄付者碑 (図9)

相生町鮎川西に住む西本^{つとむ}劫氏 (68歳) の祖父に6人の子どもがあり、末子が一致^{かずいち}氏である。『延野小学校百年史』によると、一致氏は議会議長を務め、昭和45年 (1970)、地方自治功労で勲五等瑞宝章を受章している (劫氏によると、札幌市議会議員を長年務めたとのことである)。昭和50年 (1975) ごろ逝去。一致氏夫人の実家は、鮎川の富田忠夫氏宅。一致氏の長男は精神科医だったが既に亡くなり、その夫人と長男は現在アメリカに在住。劫氏宅は西本家本家で、同氏の孫の代で15代を数える古い家系である。

* 西本一致氏 北海道札幌市琴似町 (この住所は存命当時のもの)

* 酒井照代氏 (一致氏の子ども・現在80歳位で、劫氏宅とは年賀状の交流がある) 北海道札幌市中央区在住
相生町牛輪志やこう谷 前田邦雄^{ういち}氏の父の弟が前田禹一氏。

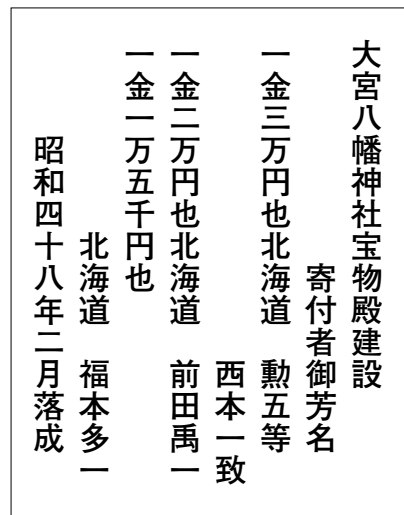


図9 寄付者碑の該当箇所 (寄付者名のうち該当氏名のみを抽出)

* 前田勝次氏（禹一氏の長男）北海道函館市在住

相生町鮎川 福本隆一氏の父は岩雄氏（大正2年（1913）生まれの87歳）であるが、その父宗次郎氏のいとこが福本多一氏である。多一氏一家は宗次郎氏の父の時代に分家し、一家で北海道へ移住したため、先祖のお墓も残っていない。多一氏は酪農を営んでいたが、平成11年（1999）に逝去された。

* 福本多一氏長男（隆一氏宅とは年賀状の交流がある）北海道砂流郡日高町在住

なお、前田禹一氏と福本多一氏とは、大正3年（1914）に延野小学校卒業の同級生である。

3）日野谷小学校新校舎落成並びに創立80周年記念事業の寄付台帳（図10）

—昭和39年（1964）4月—

北海道本別町	木 下 民次郎	1,000円
北海道	木 下 トラエ	3,000円
北海道千歳市	本 田 暢 広	1,000円
北海道朝日町	新 田 忠 見	5,000円

図10 寄付者名（該当氏名のみを抽出）

相生町延野の木下栄作氏と相生町横石下傍示の木下明彦氏の先祖が木下民次郎氏である。現在は長男の木下源太郎氏（65～70歳）の代となっている。民次郎氏夫人の実家は、相生町谷内の延都雄氏宅。

* 木下源太郎氏 北海道中川郡本別町在住

木下トラエ氏は10年前に逝去。トラエ氏の夫と民次郎氏が兄弟だったが、トラエ氏の夫は夭折した。現在は、長男の木下勝三氏の代となっている。トラエ氏の実家は、相生町中傍示の東利治氏宅。

* 木下勝三氏（65～70歳）北海道中川郡本別町在住

小松島市の本田博教氏（相生町もみじ川出身）の弟が本田暢広氏で、現在大阪市に居住している。暢広氏は自衛隊の隊員で、寄付当時は北海道千歳市に在住していた。従って、開拓を目的とした本来の意味の北海道移住者とは言えない。

相生町大久保狩揃に住む新田昭喜氏の父の弟が新田忠見氏で、明治39年(1906)に日野谷小学校を卒業し、平成7年（1995）12月20日、99歳で長逝した。

* 新田康仁氏（忠見氏長男・昭喜氏宅と年賀状の交流がある）北海道上川郡朝日町在住

5. おわりに

以上、調査結果にもとづく報告を総括すると、「地域の歴史は百年経つと忘れられる」というが、この言葉のとおり、明治以降の出来事であっても、北海道移住者については既に不明な点が多々生じている。今のうちにできる限りの調査をしておかなければ、関係者の物故に伴い、これからはますます移住の実態が分からなくなるであろう。そして、いつの時代でもそうであるが、世代を経るにつれ、故郷の実家や一族との交流が薄れているのが窺える。しかし、現在でも年賀状などの交換で交流が連続として続いているのである。

この調査自体のまとめとして、移住者が多数にのぼる割に、寄付事例が少ないという意外な結果となった。その主な理由として、

- ① 寄進者名の手掛かりとなる玉垣が少ないことである。このことは、社寺などの調査箇所が多い割に、個々の対象物（玉垣）が少ないことを意味し、神社仏閣に玉垣の多い吉野川筋と対照的といえる。
- ② 時間的制約のため、神社仏閣の内部に所蔵されている寄進物や記録文書をほとんど調査できなかったこと。

などが挙げられる。従って、時間をかけてさらに悉皆調査を進めれば、より多くの事例を発掘できる可能性が高い。

それゆえ、この調査をきっかけにして、今後、地元の有志の手で継続調査をしていただき、埋もれた先人の足跡を明らかにしていただけることを願ってやまない。

本調査の実施にあたって、本文記載の相生町民の方々、相生町教育委員会、相生町内の各神社仏閣と総代の方々並びに各学校に多大なご教示とご協力をいただいた。ここに記して感謝する。

注1 4冊の各小学校百年史には、卒業年度ごとに卒業生名簿が収録され（『延野小学校百年史』は入学者名簿）、同時に卒業生（入学者）の卒業後の住所も記載されている。この年度と住所を分析して、北海道への移住時期を把握する方法を採用した。

注2 この統計数字は、昭和62年（1987）刊『角川日本地名大辞典－北海道』下巻906ページの「真狩村」の項目中、「真狩村の誕生」の説明文による。

参考文献

相生町誌編纂委員会編『相生町誌』相生町、昭和48年（1973）

延野小学校百年史編纂委員会編『延野小学校百年史』同委員会、昭和58年（1983）

日野谷小学校創立百周年記念事業委員会編『日野谷小学校百周年記念誌』同委員会、昭和58年（1983）

平野小学校百周年記念事業委員会編『平野小学校の百年』同委員会、昭和50年（1975）

西納小学校百周年記念事業推進委員会編『西納小学校の百年』同委員会、昭和53年（1978）

平井松午『徳島県出身北海道移民の研究—とくに初期移民の輩出過程および後続移民との結び付きについて—』、『人文地理』第38巻第5号16～17ページ、昭和61年（1986）

平井松午『徳島県からの北海道団体移住—美深町入植の徳島団体を例に—』、『徳島大学教養部紀要—人文・社会科学—』第22巻3～4ページと9ページ、昭和62年（1987）

第17回資料紹介展目録『徳島県人の北海道移住』徳島県立文書館、平成11年（1999）

第20回企画展目録『北海道開拓と徳島の人びと』徳島県立文書館、平成12年（2000）

矢谷重芳編『北海道百番附』、同氏刊、大正7年（1918）

「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典—北海道』上・下巻、角川書店、昭和62年（1987）

徳島県郷土文化会館民俗文化財集編集委員会編『相生の民俗』徳島県郷土文化会館、平成2年（1990）